

異世界 子育てしながら冒険者します

# ゆるり紀行

13

Minazuki Shizuru  
水無月静琉

### ボルト

タクミの契約獣となったサンダーホーク。

### ベクトル

タクミの契約獣となったスカーレットキングレオ。小型にもなれる。

### フイト

タクミの契約獣となった飛天虎。小型にもなれる。

### マイル

タクミの契約獣となったフロストラット。

### タクミ・カマノ

異世界に風神の眷属として転生した本作の主人公。アレンとエレナの保護者。

### アレン

水神の子で、妹・エレナとともにタクミに保護された少年。格闘術が得意。

### ジュール

タクミの契約獣となったフェンリル。小型にもなれる。

### エレナ

水神の子で、タクミに保護された少女。格闘術が得意。

登場  
CHARACTER  
人物

## 第一章 知人に会いに行こう。

僕は茅野巧<sup>かやのたくみ</sup>。エーテルディアという世界に転生した元日本人だ。

何故「元」かというと、この世界の神様の一人、風神シルフィリール——シルがうっかり起こした事故で一度死んでしまったからだ。

そして、責任を感じたシルが、僕をエーテルディアに転生させてくれたのだが……シルの眷属<sup>けんぞく</sup>として転生したことが判明したり、転生先が危険な森の中だったり、その森の中で二人の子供を保護したりと、初日からいろんな出来事が目白押しだった。しかも、その保護した子——アレンとエレナと名づけた子供達は、実は水神様の子供だったのだ。

どこに行っているのか、水神様は現在所在不明だったため、僕が二人を引き取り、弟妹として一緒に生活している。

兄と慕<sup>した</sup>ってくれる子供達と冒険をしながらいろんな街を見て歩いていた僕だったが、今はガデア国の王都に戻ってきている。僕達がよくお世話になっているルーウエン伯爵<sup>はくしや</sup>家の次男である、グランヴァルト・ルーウエン様——ヴァルト様が結婚することになったと知らせを受け、結婚式に参

列するためだ。

残念ながらヴァルト様は仕事で留守だったため、まだお祝いの言葉を贈っていないんだけどね。

「きょうはどごい〜？」

「そうだな。まずは注文しに行こうか」

王都に戻ってきた翌々日、僕達は買いものをするために街へ繰り出していた。

街をいろいろと巡る予定だが、忘れないようにとあるものの注文を終わらせてしまおうと思ったのだ。

というわけで、僕達はまず宝飾店へと向かった。

「ここしてるー！」

「エレナのこれ、かったところ！」

「正解」

真珠のアクセサリを作ってもらったり、エレナが好んで身に着けている雪の結晶のブローチを購入したりしたお店である。

「これはこれは！ タクミ様ではありませんか！ ようこそおいでくださいました」

店に入ると、一番奥にいた店員がすつ飛んでくるように近づいてきた。

何度か会ったことがあるが、確かこの店長さんだ。

入り口の近くにいた店員さんを押しつけるようにしてやってくる。

「えっと、僕のことを覚えているんですか？」

「もちろんでございますよ。あれほど見事な真珠を融通してくださいましたタクミ様を忘れるなんて、そんなことできませんよ」

「あ、確かに印象には残るか」

僕の手持ちの真珠はどれも形や大きさなどの質が良く、さらに見たこともない色付き真珠まであった。そりゃあ、顔も覚えられるか。

「本日は、何かをお求めでしょうか？」

「制作依頼です。できれば、急ぎでお願いしたいんですが……あ、もちろん、その分の料金は支払いますので、お願いできませんか？」

「まずはお作りする品のお話を聞きましょう。制作するものによっては、日数がかかってしまうものもありますからね」

「それもそうですね」

「では、奥へどうぞ。こちらでお話を伺います」

僕達は店の奥にある応接室へと案内された。

「タクミ様、お久しぶりです。この度は制作依頼と伺いましたが、どのような品をお求めでしょうか？」

応接室には、以前真珠のアクセサリを作った際にルーウェン邸で会ったデザイナーさんも来てくれた。

「これを使用した装飾品を作ってもらいたいです」

僕は《無限収納》から、『色彩の迷宮』で手に入れたプラスチックっぽい素材の造花を取り出した。僕の握り拳こぶしくらいはある、パステルカラーの造花だ。

「これは！ 本物の花のようですが、作りものですかっ!？」

店長さんもデザイナーさんも食い入るように花を見つめる。

「迷宮で手に入れたものなんです。それで、これを使って髪飾りを四つ。貴族夫人が使用してもおかしくないものを三つと……」

「エレナの〜」

「この子用で一つ。お揃いに近い形で仕上げてもらえれば嬉しいですよ」

僕としては結った髪に挿して使う簪かんざしみたいなものをイメージしているので、それも伝える。

「ご夫人というのは、ルーウェン伯の奥方、ご子息の奥方ですね。申し訳ありません、もう御一方はどなたでしょうか？」

店長さんが言っているのは、子供達が「おばあ様」と呼んで慕うルーウェン伯爵家の奥様であるレベッカさん。ルーウェン伯爵家の長男、グランヴェリオさんの奥さんであるアルメリアさんの二人だ。

「次男、グランヴァルト様が結婚されるので、そのお相手にお祝いとして差し上げたいんです。急ぎと依頼したのは、結婚式に近いのでそれに間に合わせたいからです」

最後の一人は、まだ名前すら聞いていないヴァルト様の結婚相手の女性である。

「そうでしたか」

僕と店長さんが話している間にデザイナーさんが画帳を取り出して、二本軸ふたねっていつのか？ 二股？ の軸のトップに、持ち込みの花の画を描く。

花自体がわりとゴージャスなので、その花だけでも映えそうな髪飾りだ。

「ベースはこのようにしまして、あとは個別で花の周りを華やかにする感じでいかがでしょうか？」

「いいですね。あとはそうだな。チェーンとかに石を付けてしゃらしゃらと動きに合わせて揺ゆれるようなのはどうですか？」

「ほお、それは斬新ざんしんですね」

「あれ？ 斬新ざんしんってことはあまり見ない形になるのか？ マナー違反だったりしますか？」

「いいえ、そのようなことはありませんよ」

「そうですか。良かった〜」

髪飾りは頭に固定されていないといけない……とかだったらまずいが、大丈夫だったようだ。

「あ、宝石ですが、僕の手持ちの真珠を……と言いたいところですが、真珠を使うと怒られるので、水晶を使ってください。子供用に使えるようなガラス玉もあります」

「タクミ様がお持ちの真珠は大変素晴らしいものですからね。贈答品としては高価過ぎますから、注意されるのも仕方ありませんよ」

僕としては《無限収納》で眠るだけになるくらいなら使ってもらったほうがいいのだが、レベッカさん達からしたらそうはいかないらしい。なので、最近はお受け取ってもらおうのは諦めようと思っている。

「……真珠、買い取ってくれますか？」

「お売りくださるんですか？ 喜んで買い取りましょう！」

お金を必要としているわけではないが、市場に回収している数を少し増やしておきたいので、店長さんに話を持ち掛けてみたら、思いの外喜んでくれた。

それなら、大きいものや色付きは高額になりすぎるので避けて、小さめの粒をいくつか売ろう。

「それじゃあ、髪飾りの注文が終わったらお出ししますね……エレナ、髪飾りは、誰にどの色がいい？」

「んとね……」

真珠の売買は後に回して、自分達の注文をしようことにする。

造花の色は何種類かあったので、まずはエレナを選んでもらおう。

「おばあさまは……きいろ！ おねえさまは……ピンク！」

赤い髪に赤い瞳のレベッカさんには黄色の花。焦げ茶の髪に青い瞳のアルメリアさんにはピンク

の花。

「ヴァルト様のお嫁さんは確か……銀髪に青い瞳って言うていたよな」

「じゃあ、あお！」

「エレナは？」

「エレナはしろがいい！」

なかなか良いチョイスだと思う。

「水晶は同系色でまとめるほうがいいかな」

レベッカさんには黄水晶か橙水晶、アルメリアさんには赤水晶か紅水晶、お嫁さんには青水晶か紫水晶ってところかな？ まあ、最終決定はデザイナーさんに任せよう。

「エレナ用のガラス玉はどんな色でも合いそうだから、好きな色にしな」

「えっとね、えっとね……」

「珍しく悩んでいるな。何色で悩んでいるんだ？」

「あかもいいけど、きいろもいいの。あ、ピンクも！」

エレナは時間をかけて真剣に悩んでいた。

うちの子達は普段からわりと即決することが多いので珍しいな。エレナは小さくても女の子ってことかな？

「そうだな、チェーンを取り外して、石の色を気分に取り替えられるようにでき

ますか？」

そう提案してみると、デザイナーさんは目を輝かせる。

「できます！なるほど、取り替えることができれば、本体一つでいくつもの楽しみ方ができるんですね！素晴らしい！」

「あ、うん、できるなら、それでお願いします」  
もの凄く絶賛された。

僕はただエレナがかなり迷っていたので、ならば全部作ってしまえばいい。とはいえ同じような髪飾りがたくさんあっても仕方がないから、つけ替え。そんな軽い気持ちで提案してみたけど、ただで済んだ。

「おにいちゃん、ありがとう」

「エレナが喜んでくれたら、お兄ちゃんも嬉しいよ」

隣に座っているエレナがくいくい服を引き、可愛い笑顔でお礼を言ってくれる。提案したかいがあつたつてもんだ。

「タクミ様！」

「あ、はい、大丈夫です。そういう商品を作って売っても問題ありません」

「ありがとうございます」

店長さんの期待の籠もった表情で何が言いたいかわかったので先回りして答えると、店長さんは

晴れやかな笑みを見せた。

「ですが、こちらの品を先に作ってくださいね」

「それはもちろんでございます」

デザイナーさんも早速デザインを思いついたのか、いくつかのデザインを描くとテーブルに並べていく。

「これ、おばあさまに、にあいそうー！」

「こっちはおねえさま！」

「こっちは、エレナの？」

「かわいいー！」

アレンとエレナが、はしやぎながらデザイン画を見比べていく。

夫人用はシンプルで上品な感じに。エレナ用だと思われるものは、レースのリボンを使って可愛さの際立つデザインになっていた。

「どうですか？」

「いいですね。これをお願いします」

「では、急ぎで仕上げさせていただきます」

具体的にどれを誰用にするか決めれば、注文は終了だ。

一応、レベッカさん達の分も色違いの水晶で取り替え用も作ってもらうようにお願いした。あと、

ついでとばかりに、ヴァルト様のお嫁さん用にはお揃いで使えるような首飾りと耳飾りも合わせてお願いした。お祝い品だし、このくらいならいいだろう。

使う水晶を手持ちから出してお店に預け、真珠を売ってから僕は宝飾店を後にしたのだった。

次は木製の細工や家具の店だ。

「こんにちは〜」

「いらっしゃ……ん？ 坊主と嬢ちゃんは、以前にうちに来たことがあるな？」

「うん、ある〜。おぼえてる〜？」

「おう、覚えているぞ。変わったもんを注文してもらったからな」

「うすとー」

「きねー」

「ああ、そんな名前だったな」

「その節はお世話になりました」

この店には以前、白と杵を作ってもらったのだが、店主は僕達のことを覚えていたようだ。

「ガヤの木ですり鉢を作るなんて注文、記憶に残らないわけがないよな？」

「ははは〜」

通常、ガヤの木は家具などを作るのに使う高級素材だ。それで白と杵を作ったとなれば、店主が

こう言うのも納得だ。

「それで今日はどうした？ ガヤの木で食器でも作りに来たのか？」

「ああ、それもいいですね」

「おい！」

たぶん、店主は冗談で言ったんだろうけど、僕がそれに乗ってみたら鋭い突っ込みが返ってきた。

「冗談ですよ」

「おまえさんの場合は冗談に聞こえんわ！ というか、食器の場合はオレのどこじゃないからな！」

この店は家具などが専門っぽいので、食器を頼む場合は他の店にお願いしないといけないよ  
うだ。

ということは、本来は白と杵も専門外だったのかもしれない。ただ、道具類としては大きい  
部類だし、簡単なものだったから作ってくれたのかな？

「それでしたら、ガヤの木で食器を作ってくれる店を知っていたら教えてください」

「冗談だったんじゃないのかよ！」

「丈夫そうだし、燃えにくい食器があってもいいかな〜と思いき直しまして。本当に作ってもらおう  
と思います。こちらにも今日お願いしようとしていたものとは違いますが、ガヤの木で家具も願  
いして良いですか？」

今からではヴァルト様の結婚式には間に合わないだろうが、後から贈っても良さそうなので、ソ

ファーなどの家具をいくつか注文しておこう。

「本当か!? もしろんだ!」

すると、店主が思いの外喜んでいた。

そういえば、職人つて良い素材を使ってみたいと思う傾向があったな。これなら白と杵を頼んだ時にもっといろんなものを頼んでおけば良かったな。

「本当ですよ。いろいろと注文していいのなら、あれもこれも注文しますよ!」

「うっしやー! どんと任せろ!」

「お願いします。でも、ガヤの木以外の注文も受けてくださいね」

「おうよ!」

ガヤの木の家具の注文の前に、今日の本題である注文を聞いてもらう。

「それで今日お願いしたかったものなんですけど……木を出せるところはありますか?」

「じゃあ、裏に資材置き場があるから、そっちに来てくれ」

場所を移動して、僕は《無限収納》から真っ黒な木を取り出す。

「まずはこれを見てください」

「うお! 何だ、この木は! 断面も同じ色だぞ?」

木を見た途端、店主は驚きの声を上げて、まじまじと木を眺め始める。

「迷宮で見つけた木です」

「迷宮産かよ。へえ、色を塗っているわけじゃなくて、もともと色付きなのか」

「そうなの!」

すると、アレンとエレナが嬉しそうに声を上げた。

「これでアレンたちのイスと」

「エレナたちのテーブル」

「つくって!」

二人が言うように、まずは子供達用の椅子とテーブルを作ってもらうつもりだ。外でも使えるような脚が短くて小さなものを、子供達に持たせておくことにしたのだ。

僕は続いて、今度は水玉模様の木、それも色違いのものを七本取り出す。

「なっ!?!」

店主は黒い木以上に驚いていた。

「これも迷宮産です。で、これらで大きな宝箱風の物入れを……全部で七個」

こっちは子供達とジュール達全員分だ。それぞれ好きな色のもので作って、そのままお宝入れとして使いたいと強請られたのである。

「はあ……兄ちゃんには驚かされることばかりだな」

店主は深く、疲れたように溜め息をつく。

「宝箱だったな。具体的な大きさはどのくらいだ?」

「そうですね、僕が一人で抱え上げられるくらいの大きさだったら、この一本で作れますか？」  
「ああ、それだったら余裕でいけるな」

「じゃあ、そのくらいの大きさでお願いします」

七色の水玉模様の宝箱。できあがったものを並べたら、さぞ壯観だろうな。とても楽しみである。

「あ、ガヤの木もここに出していいですね」

ガヤの木は大きいし太いから、とりあえず二本もあればいいかな？

「こっちは二人掛けのソファがいいかな。あとはテーブルと椅子のセットとか……まあ、その他諸々を適当にお願いします」

特に何が欲しいとかはないので、店主にお任せでお願いします。

ヴァルト様へのお祝いは、できあがったものの中から選ばばいいだろう。残りは自分の部屋で使ったり、贈りもの用としてストックしておいたりしてもいい。

「おいおい、何だよその注文は！ そんなこと言うと、本当にオレが作りたいものを好き勝手に作るぞ！」

「はい、そんな感じでお願いします」

「……いいのよ」

店主は若干呆れている様子だが、気にしないでおこう。

「ガヤの木は高価で希少なものだってわかってるのか？ 一、二度来ただけの店にボンと預けていいような品じゃないぞ。オレが量をちよるまかして売る可能性だってあるんだぞ！」

「ははは。妙なことを企む人はそんな注意はしてくれませんか、おじさんは大丈夫ですね！」

「だごじょうぢ〜」

「……」

ちよるまかす人は、こんな風に注意なんてしてくれない。それに、アレンとエレナも警戒していない。ということは、店主は良い人だってことだろう。心配ないな。

「それで、前金ほどのくらい払えばいいですか？」

「ガヤの木を持ち込んでいる時点で、前金なんていらんよ！ というか、こんなにガヤの木を預かるのは怖いんだが!? うちの倉庫はそこまで頑丈じゃないんだぞ！」

「盗難の心配ですか？ それはほら、僕がガヤの木を持ち込んだことは誰も知りませんし、大丈夫ですよ。それに、仮に盗難にあっても責める気はありませんし、賠償も求めないですよ？」

「だとしても、せめて、小分けで持ち込んでくれ！ さすがにこんな大木を二本も置いていかれたら、心配で眠れなくなる！ 胃が痛くなる！」

店主が切実そうに訴えてくるので、ガヤの木を一本回収する。

「もう一声！ そうだな、この長さがあれば……あく、でも、切るのはかなり時間がかかるか」

「じゃあ、短めのものを出します」

もう一本のガヤの木も一旦回収し、別のガヤの木を取り出す。

僕が持っているガヤの木は、イビルパイパーを倒した際に使った風魔法に巻き込まれて切り倒されたものだ。当然、木の根元部分を狙って真っ直ぐに飛んだわけじゃないので、実は短いものもかなりある。

「まだあるのかよ！ 凄いな！」

「長さはこれで足りませんか？」

「充分だ」

「できれば、さっきのカラフルな木のほうを優先でお願いします。どのくらいでできますか？」

子供達用の椅子とテーブル、宝箱は僕が王都にいるうちに受け取りたい。今後の予定を決めているわけではないが、あまり時間がかかるようだと困るからな。

「そうだな。五日後つてところだな」

「わかりました。じゃあ、そのくらいに取りに来ます。それで、ガヤの木のほうですが、他に仕事が入ったならそっちを優先しても大丈夫ですので、仕上がったタイミングでルーウェン伯爵家に連絡してください」

ガヤの木の家具は僕が王都にいらなくても大丈夫のように、マティアスさんに受け取りを頼んでおこう。あ、ついでに加工前のガヤの木も、邸の倉庫とかにいくつか置かせてもらっておこうかな。そうすれば、ガヤの木が追加で欲しくなった時、いつでも持つてもらえるな。

「ルーウェン伯つて……おまえさん、お貴族様だったのかよ！」

「いいえ、ルーウェン家にお世話になっているだけのただの冒険者ですよ。ガヤの木の家具は、その家の方に贈るので、貴族が使ってもいいような感じにお願いしますね」

「おう、腕を振るつて作らせてもらうよ」

「お願いします」

「「しまーすー」」

家具工房を後にした僕は、続いて紹介してもらった食器などを作る工房を忘れずに訪れた。

そこでガヤの木の食器をお願いしたのだが……大変驚かれたものの大喜びで引き受けてもらったので、いろいろとお願ひしておいた。

食器工房を出た後は、手持ちが少なくなっていた小麦粉を買い足しつつ、街をぶらぶらしていた。

「さて、次はどうする？」

「「しんではー？」」

「神殿？ そうだな、しばらく王都に滞在することだし、挨拶しておこうか」

「「うん、あいさつしようー」」

アレンとエレナの勧めもあって、僕は神殿にやって来た。

(シル)

(巧さん！ 来てくれたんですね！)

声を出さずにシルに呼びかけると、すぐに嬉しそうな声が返ってきた。

(子供達が行こうって言うてくれたからね)

(良い子ですね！)

(そうだろう！ 良い子なんだよ！)

(巧さんは立派に兄バカをしていますよね！)

(ははっ、そうかもな。でも、二人とも本当に良い子だぞ)

アレンとエレナは可愛いし、賢い。それは欲目ではなく、的確に評価していると思う。

だがまあ、それを抜きにしたとしても、僕は間違いなく兄バカである。

(ふふっ、本当に仲が良いですね)。羨ましいです)

(ん？ そういえば、シル達はウインデル様とは兄弟になるのか？)

確か、シル達四神——風神であるシルと水神ウインデル様、火神サラマンテイル様、土神ノ

ムードル様は、創造神マリアノーラ様が創った存在だといわれる神話があったはずだ。

(人から見たらそうですね。マリアノーラ様が親、僕達が子ということになるので、ウインデル、

サラマンテイル、ノムードルと僕は兄弟ということになりますね。ただ、誰が長男とか、そう

いうのはないですけどね)

(なるほどな)

いわゆる四つ子っていう感じの認識でいいだろう。

(じゃあ、アレンとエレナはシルの甥っ子姪っ子ってことだな)

(そういえば、そうですね！ ……はっ！ じゃ、じゃあ、巧さんも僕の甥っ子ってことですね！)

(いや、何でだよ)

(甥っ子と姪っ子の兄は、やっぱり甥っ子ですよね？)

(いや、そこは無理矢理関係づけなくてもいいんじゃないか？ 僕はシルの眷属だよ)

(眷属より甥っ子のほうがいいです！)

(……そうか)

眷属は……部下か？ まあ、部下と甥っ子なら、甥っ子のほうが関係性は近いかな？

でも、僕の身体はシルが創ったんだから、僕がシルの子供、だと言えなくはないのか？ まあ、そ

のこの指摘はないから、突っ込まないでおうか。

とにかく、どちらが良いなんてことはわからないし、シルの好きに思わせておけばいいか。

(で、羨ましそうにしていたけど、シル達は兄弟仲が悪いのか？)

(いいえ、悪いというわけではありませんよ。ただ、事務的なやりとりが多くて、そんなに交流

がなかったっていう感じですかね)

(へえ、そうなんだ)

(そうなんです。でも、最近は巧さんのお蔭で交流が増えましたね)

(はあ?)

僕のお蔭? ……あつ!

(食べものか!)

(そうです。みんなでお茶をしたり、食事をしたりする機会が増えました)

(ははは)。えっと、良かったな……でいいんだよな?)

(はい。時には取り合いになったりしますが、楽しいひと時になっています。巧さん、ありがとうございます)

親交を深めることになったのなら、良かったかな?

いや、でも、取り合いってことは喧嘩けんかをしているから駄目だめなような気がするが……それも含めて楽しんでいるのなら良いのか?

(まあ、切っ掛けになったのなら良かったよ。そういえば、次のリクエストはどうする? 今、聞くけど、決まっているか?)

(決まっているとさえ、決まっていますのですが……)

シルには月に一回くらいなら食べたいもののリクエストを聞くと言ってある。

前にリクエストされたことがあるのは……ルイビアの街にいた頃に肉まんを頼まれた。その後はセルディーク国に行った時にパウンドケーキを送った。だが、これは特にリクエストだったわけではない。

こちらから聞かないと、いきなり材料が送られてきたりするので、せつかくなら直接聞こうと思っただけけど、何故かシルは言い淀ためどんでいた。

(何だ? どうした?)

(その……巧さんが作ったところをまだ見ていないんですけど……)

(まだ作ったことがないもの? 何だ? とりあえず、言ってみて。作れそうなら作るし、駄目なら駄目って断るから)

(マリアノール様が、いちごだいふく、っていうものが食べたいって言っているんですね。巧さん、わかりますか?)

(……なるほど)

苺大福いちごだいふくか。確かにまだ作ったことはないものだな。

というか、前から思っていたけど、創造神のマリアノール様は地球のものに詳しいよな。

えっと、材料は……イチゴの実に餡子あんこ、餅もちだな。あ、大福で使う餅はただの餅じゃなくて、甘みを加えるんだっただかな? とはいえ、材料は問題ないな。

(作れなくはないかな)

(本当ですか?!)

(うん、形が多少歪ひずになっても目を瞑つむってくれるならな)

(全然問題ないです! 大丈夫ならお願いしたいです!)

(わかった。手が空いた時に作ってみるよ)

(ありがとうございます！ 楽しみにしています！)

尊大福なら子供達も好きそうだし、時間があつたらすぐに作ってみよう。

(じゃあ、そろそろ行くよ)

(はい、これから寒くなりますから、体調には気をつけてくださいね)

(いやいや、びつくりするくらい身体は丈夫だから、僕は風邪かぜとかは引かない気がするよ！)

(あ、そういえば、そうでしたね。でも、甥っ子の体調を気に掛けてみたかったです)

(そこに戻るんだな。まあでも、気をつけるよ)

(はい！ じゃあ、また会いに来てくださいね)

(うん、わかったよ)

シルとの会話が終わると、それを察してか、椅子に座って待っていた子供達が嬉しそうに駆け寄ってくる。

「おわったー?」

「うん、終わったよ。待ちくたびれた?」

「だいじょうぶだよー!」

「そうか。でも、待っていてくれてありがとう」

「うん!」

やっぱりうちの子達は良い子である。

「じゃあ、次はどこに行こうか」

「ギルドいこうー!」

「ギルドって、冒険者ギルドか? そうだな、会えるかどうか分からないけど、アンディさんとケイミーさんに会いに行ってみるか?」

「うんー!」

ギルドマスターであるアンディさんとその奥さんのケイミーさんに会うため、僕達は冒険者ギルドに向かうことにした。

だいたい半年振りかな? 久しぶりに王都の冒険者ギルドに来たので、受付でアンディさんへの面会を申し出た。

当然、ギルドマスターに会いたいと言ってすんなり会わせてもらえるわけではないけど……僕がAランクだったため、アンディさんに直接確認してもらえることになった。

「おい、おまえ!」

受付の人が確認しに行ってくれている間、僕達が依頼ボードを眺めて時間を潰していると、知らない男性に声をかけられた。

「ここは優男やさしいおとこや子供こどもが来るような場所じゃないぞ!」

「……」

相手は頬に大きな傷のある強面で体格の良い男性だ。鋭い目つきで睨みつけるようにして怒鳴ってくる。これは……絡まっているんだろうか？

「おい、あれって『刹那』じゃないか!？」

「ああ、そうだ！ よりにもよって『刹那』に絡みに行くなんて、誰だよあいつ！」

「あいつは最近、王都に来た奴だよ。『刹那』が王都を離れていた間にな」

「おい、誰か止めるよ」

「嫌だよ。巻き込まれたくない！」

ぼそぼそと周囲にいる冒険者達の話し声が聞こえてくる。

遠目で見ているだけじゃなくて、止めてくれればいいんだけど……そのような気遣いはないよ  
うだ。

「おい！ 聞いているのかよ！」

「えっと、依頼書を見るくらいなら、自由だと思っんですが……」

「危ないだろう！」

「……ん？」

「多くはないが、この時間でも酒が入っているやつもいるにはいるんだぞ！ 子供を連れてくるよ  
うな場所じゃないだろう!!」

あれ？ 絡まっているわけじゃないようだ。

そういえば、アレンとエレナが警戒していないんだよね。じゃあ、彼は本当に僕達のことを心配して声を掛けてきたのか？ ただの親切な人？

「えっと……ご心配ありがとうございます。僕も子供達も一応、冒険者ですし、戦闘の心得くらいはありますので大丈夫ですよ」

「冒険者なのか？」

「はい、そうです」

「子供達も？」

「はい」

「戦えるのか？」

「ええ、僕も子供達も問題なく」

「そうか、それならいいんだ」

親切な彼が納得したように笑みを見せるが、強面のせいで笑みが怖い。

「おい、こら、ギゼル！ おまえ、何やっているんだよ！」

そこに新たに三人の男性がやって来て、そのうちの一人が親切な彼——ギゼルさんの後頭部を叩いた。

「周りがざわついているぞ！ 今度は何をやらかした！」

「い、いや、だってよお。子供連れがいたから、危ないと思つてよお」

「強面のおまえが子供に近づいたら、子供が泣くだろうが！ また犯罪者扱いされたいのかっ！」

「今回は泣かせてない！」

「君、うちのメンバーが絡んですまなかつた」

「本当にすまん。こいつ、こんな顔だが子供好きだよ。悪気はないんだ」

「本当に悪い。許してくれると嬉しい」

ギゼルさんの仲間と思われる三人が、ギゼルさんが悪いものだと思つて一斉に謝罪してくる。

ギゼルさん……こんなに強面なのに子供好きなのか。

ここまで見た目と性格や行動が一致しない人は初めてだ。

「いえ、彼は心配して声を掛けてくれただけで、何かされたわけではないので謝罪は結構ですよ」

「いや、だが、子供達が怯えただろう？」

「大丈夫です」

実際、うちの子達はまったく怯えてないのでな。

「えっ!! 本当かっ!? 近寄るだけで子供にギャン泣きされたり、迷子の子に声を掛けたら誘拐犯

に間違われたりするギゼルに声を掛けられたのに平気だど!？」

「……」

うわ、ギゼルさん過去の経験が凄いい!!

僕も彼のことは強面だとは思うが、ギャン泣きに誘拐犯？ 心が折れる経験過ぎないか!？」

「アレン、エレナ、最初に声を掛けて来た人——ギゼルさんが肩車してくれるって。高いところに貼つてある依頼書を見せてもらいな」

「いいの？ わーいー!」

あまりにもギゼルさんが不憫過ぎたので、僕は逆に子供達をギゼルさんに絡みに行くように仕向ける。

「なっ! はあ!？」

「かた、のせて〜」

「お、おう……こうか？」

「そうー!」

驚くギゼルさんだが、子供達の指示に従うように恐る恐る子供達を抱え上げ、肩に乗せるように座らせる。

肩車ではなく、両肩に一人ずつ、二人同時に肩に乗せた。体格が良いギゼルさんだからできる乗せ方だな。

「おお、たかーいー!」

「大丈夫か？ 怖くないか？」

「だじじょうぶー!」



アレンとエレナはとても楽しそうである。ギゼルさんは僕よりも頭二つ分くらいは背が高いから、今までなかった視線の高さであろう。

ギゼルさんは落とさないか心配しているようで、ちよつとハラハラした様子だけど……うちの子達なら、落とされたとしてもしつかり着地するだろう。

「……怯えてない、だど!?」

「……それどころか喜んでるぞ!」

「……夢か? これは夢だな?」

ギゼルさんの仲間達は、子供達が喜ぶ姿を見て驚愕きょうかくというか、呆然ぼうぜんとしていた。

……ギゼルさんはどれだけ子供に泣かれたのだろうか。

「ねえねえ」

「お、おう、どうした?」

「あっち、あっち!」

「いらいしょ、みよう!」

「お、おう」

アレンとエレナが依頼書の方向を見るように指示すると、ギゼルさんはゆっくりと慎重に動き出す。まるでスローモーションで見ているかのような動きである。

「……あれはヤバイ絵面だな」

「……ああ、あれは犯罪だ」

「……ギゼルのやつ、やっぱり捕まるんじゃないか？」

ギゼルさんの仲間達はまだ呆然としているが、呟つぶやいている内容がちよつと酷い。

「おにいちゃん、おにいちゃん」

「どうしたんだい？」

「このいらい」

「したい！」

アレンとエレナがある依頼書を指差しながら僕を呼んでくる。

「今日は依頼を受ける予定はないから、今度になるぞ」

「ええ、きょうがいい」

「今からじゃ無理だよ。それで、何の依頼だ？」

「これ」

今日は依頼を受けるつもりはないが、とりあえず内容だけは確認する。

「え、これ？」

「うん、それ」

子供達が指差していたのは、ワイバーン討伐とうばつの依頼書だった。

「ドラゴンのおにく！」

「てにいれよう！」

「あ……」

……子供達は、以前僕が冗談として言ったドラゴンの肉の入手を虎視眈眈こしたんたんと狙っていたようだ。

確かにワイバーンも下位の飛竜に属する魔物だ。まあ、毒竜とも呼ばれる存在でもあるけどな。

「ちよ、ちよと待て!? ワイバーン討伐に行くって、冗談だよな!?」

「じょうだんじゃないもん！」

「どうばついくもん！」

子供達は心配そうにするギゼルさんを余計あほに煽る。

「さ、さすがに行っちゃ駄目だぞ！ ってか、ワイバーン討伐はAランクの、それもパーティ推奨すいしょうの依頼なんだからな！ そもそもおまえ達じゃ依頼は受けられないぞ！」

「ええ、そうなの？」

「そうなんだよ！ ——というか、兄貴のおまえが止めるよ。何でオレが必死に止めてんだよ！ 成り行きを見守っていたら、ギゼルさんに怒られてしまった。」

「いや……僕、子供達のこと止めるのが苦手なんですよ」

「そこは頑張って止めるよ！ 駄目なものは駄目って教えるのが、おまえの役目だろうが！」

「悪いことならさすがに止めますよ。でも、それ以外で子供達がやりたいって言ったことはやらせてあげる方針なんですよね」

「いやいやいや!! ワイバーンは駄目だろう!?!」

「まあ、さすがにワイバーンはちよつと躊躇ちゆうちよしますよね〜」

「ちよつと何か? ちよつとだけなのか!?!」

うん、ちよつとだ。僕自身もワイバーンを見たいと思つちやつたりするのでな。

「おにいちゃん、だめ〜?」

さて、この場合はどうしたらいいんだろうな〜。

「……そもそも、ワイバーンの肉って美味しいのかな?」

「おいしくないの〜?」

ワイバーンは毒竜と呼ばれる通り、毒を持つドラゴンだが、毒は尻尾しつぽにあるためお肉は問題なく食べることはできる。ただ、それは知っていても、さすがに美味しいかどうかまでは知らない。

「とても美味しいですよ」

僕の疑問に答えてくれたのは、いつの間にか近くに来ていたアンディさんだった。

「あ、アンディさん、お久しぶりです」

「こんにちは〜」

「タクミくん、お久しぶりですね。アレンくんもエレナさんも、こんにちは。お元気そうだなによります」

受付の人から僕達が来ていると聞いて、わざわざこちらに来てくれたのだろう。

「急に来てしまいましたか、お仕事は大丈夫ですか?」

「タクミくんが来てくださったというのに、仕事なんてしてられませんよ」

「いやいや、そこは仕事を優先してください」

「タクミくんがワイバーンの依頼を片付けてくれるなら、問題ありません!」

「まだ依頼を受けるなんて決めていませんから! そもそもランクが足りませんって!」

「私が許可を出せば、問題ありませんよ!」

「それは、職権濫用しよくけんらんようです!」

アンディさんはにこやかに、ワイバーンの依頼を僕達に受理させようとしてくる。

「滞とどっている依頼なので、片づけてくれたら嬉しいのですが……本当に駄目ですか?」

「うん〜」

「本当ですか? ありがとうございます」

「こちら、勝手に依頼を受けない! ——アンディさんも子供達の言葉を鵜呑うみにしないで!」

「「ええ〜」」

子供達とアンディさんが揃って不満そうな声を上げる。

「アンディさん、うちの子と同じような反応をしないでください。子供ですかっ! というか、ギルドマスターとしての威厳いげんがなくなりませよ」

ギルドマスターであるアンディさんの登場からこれまでのやりとりを、子供達を肩に乗せたまま

聞いているギゼルさんがかなり狼狽うろたえている。

いや、ギゼルさんだけじゃなく、僕達のやりとりが聞こえる範囲の人が呆然ぼうぜんとしていた。

「タクミさんの言う通りね！」

「うわっ!? ケ、ケイミー!？」

そんな空気の中、ケイミーさんが、アンディさんの後ろからそっと近づいて来ると、彼の耳を摘み上げた。

「痛っ！ 痛いですよ、ケイミー」

「痛くしているもの、当然ね」

「酷いですよ」

「だって、仕事をサボっているんですもの」

「サボっていませんって！ ワイバーンの討伐依頼を受けてもらえるように頼んでいました！」

「あら、そうなの？」

「そうなんです！」

アンディさんとケイミーさん夫婦は、相変わらず仲が良さそうである。

挨拶がまだだったので、ぺこりと頭を下げる。

「ケイミーさん、お久しぶりです」

「タクミさん、アレンくん、エレナちゃん、久しぶりね。元気だったかしら？」

「うん、げんきだよ」

引き続き、ギゼルさんの肩の上から挨拶を返す子供達。下りる気はないようだ。

「タクミさんがワイバーンの討伐に行ってくれるの？」

「今のところ行く予定はありませんね」

僕がはつきりとそう答えると、アレンとエレナが不満そうに声を上げる。

「ええ〜」

「子供達は行きたいみたいよ？」

「大事な予定が控ひかえていますからね。しばらくは大きな依頼は受けません」

「むっ〜〜〜」

何日かかるかわからないだけでなく、怪我する恐れまである依頼は、今は避けたい。

ヴァルト様の結婚式が終わるまでは、時間があっても近場での依頼しか受けない！

こればかりは、子供達にどんなにお願いされても駄目だ。

「……粘ねばっても駄目そうね」

「ええ、今回はさすがに」

「残念。でも、その予定とやらが終わったら、よろしくね」

「わかった！」

「……」

僕の決意を感じ取ったのか、ケイミーさんは引き下がってくれたけど、子供達から結婚式が終わった後に強請<sup>ねだ</sup>られたら……どうなるかな？

正直、ワイバーンのお肉が気になるし、依頼を受けそうな気がする？ まあ、依頼がその頃まで残っていたらね。

「それにしても、タクミくん達は『赤』のパーティとは知り合いましたか？」

「『赤』のパーティですか？ ギゼルさん達のことなら、今日初めて会いましたよ」

「おや、そうなのですか？ それにしては、子供達がとても懐いているようですね」

「ギゼルさんの人柄が良いからですね」

人見知りをしなくなってきたうちの子達は社交的なので、相手の人柄さえ良ければすぐに仲良くなる。その代わり、腹に一物<sup>いももの</sup>を抱えている人物にはいっさい懐かないだろう。

「おじちゃん、いいひと〜」

「アレン、エレナ、名前を呼ぼうか」

「ギゼルさん〜」

「うん、そうだね」

アレンとエレナがつらつとギゼルさんのことを「おじちゃん」呼ばわりする。

ルイビアの街にいた頃に、三十代半ばより年嵩<sup>としかさ</sup>の冒険者達が、こぞつて子供達に「おじちゃん」と呼ばせていたせいだな。

ギゼルさんは三十代……前半？ 半ばかな？ 本人の許可なくおじさん呼ばわりは失礼な年頃なので、僕は子供達に注意したが――

「……おじちゃんの問題ない」

「うん、おじちゃん〜」

「……いいんですか」

「いい」

ギゼルさん本人から許可が出た。「おじちゃん」でいいんだ。

三十代半ばなら、まだ「お兄さん」だと言いたい歳じゃないのかな？と、僕は思うんだけど……違うようだ。

「あらあら、すっかり懐いているわね。そういえば、タクミさん、セルデーク国に行っていたのっ」

「ええ、最近まで行っていましたが……どうしてケイミーさんが知っているんですか？」

「ギルド同士の情報交換は密<sup>みつ</sup>になっているもの」

つい最近のことなのに、何でもう知っているのかな!? 本当にこの世界の情報の伝達速度が速くて怖い！

「それで、子供達の二つ名がついたのは知っているのかしら？」

「はあ!？」

突然、ケイミーさんが爆弾を落としてくる。

『蒼の双撃』と決まったようですよ」

ケイミーさんに続いて、アンディさんが子供達の二つ名を告げる。

「ええー!? ちょっと待って！ 待ってください。え、本当にうちの子達に二つ名がついたんですかっ!？」

「ええ、本当ですよ」

いつの間にか、子供達に二つ名がついていたよ！ 『蒼の双撃』だって!？」

しかも、これ、何だか聞き覚えがある。もしかしなくても、発信源はセルディーク国で知り合った冒険者、『暁の星』パーティか!？」

「おお〜」

「アレンと」

「エレナの」

「ふたつな!」

子供達は目を輝かせる。

「ええ、そうよ。『蒼の双撃』ね」

「おおのそうげき！ かっこいい!」

「ふふっ、良かったわね〜」

「うん!」

アレンとエレナは、どうやら自分達の二つ名を気に入ったようだ。

「あのちっこいのに二つ名だってよ!」

『刹那』の弟妹だろう?」

『灰狼』の話じゃ、あの子供達もかなりやるって話だしな」

「まじかっ!? さすがAランクの弟妹ってところか?」

周りの冒険者達がひそひそと話しているのが聞こえてきた。

情報とかは、こうやって広がっていくんだな。というか、絶対にケイミーさんは、周りに人がいるのを確認してからこの話題を出したよな?」

「そういえば、『蒼の双撃』が『麗人』をやりこめていたっていう話も出ていたんだけど……それは本当?」

『麗人』というのは、『暁の星』のリーダー、ブライアンさんの二つ名だ。

「ブライアンさんのやりとりまで伝わってきているんですか!？」

「あら、そんな反応をするってことは、本当なのね〜」

この世界の伝達能力が、本当に怖い!

「はあ……。子供達のこととは極力目立たないようにしていたんですけどね。二つ名がついたら、リンクを抑えている意味がなくなるじゃないですか〜」

「アレンさんとエレナちゃんは、どんなに大人しくしていても目立つ存在でしょう」

「……」

そうなんだよね。ケイミーさんの言う通り、アレンとエレナは、たとえ大人しくしていても注目を浴びやすい。目を引きやすいっていうのか？

何でだ？ 血か？ 神の血筋だからか？

そう考えていると、アンデイさんが尋ねてくる。

「子供達はDランクでしたよね？」

「はい、そうですね」

「では、すぐにでもCランクに上げましょう！」

「いやいや、何を言っているんですかっ！」

「ここまできたら逆にランクを上げて、手出しされないように確固たる立場を手に入れるべきです！」

「……」

アンデイさんの言っていることには一理ある。

子供達に二つ名がついた以上、目立つことは必至だ。それなら、子供なのに高ランクだと目立つという理由だけで避けていたランクアップは……もう避ける必要はないのか？

ん、それなら積極的にランクを上げさせるべきかな？ 強いと知れ渡れば、手を出してくる者

は減るだろう。……多少は。

「Cランクでしたら、今までの実績で上げられます」

「ん、……どうするべきか」

子供だというだけで、ランク云々うんぬん関係なしに絡んでくる者はいる。

現に、Aランクの僕でも絡まれることはあるしな。なので、そういう人は勘定に入れないとして……減るかな？

「悩まれていますね」

「……そうですね」

「ランク！」

「あげる！」

僕が悩んでいると、アレンとエレナが両手を挙げて声を上げる。

「危ないから、両手を離さない！ というか、そろそろギゼルさんから下りようか」

さすがにずっとギゼルさんの肩に座りっぱなしというのは悪いので、子供達に下りるように言う。

「ギゼルさん、長々とすみません。ありがとうございました」

「おじちゃん、ありがとう」

「い、いや、いつでもやってやるからな」

「ほ、ほんとうに」

立ち読みサンプル  
はここまで

「ああ」

「わーい！」

アンディさん達と話している間、ほぼ口を挟まず子供達の椅子の役割をしていたギゼルさんだが、懲りずにまた子供達の相手をしてくれるそうだ。

冒険者ギルドで出会った際に、肩車っていうか肩椅子を強請りそうだが……止めたほうがいいのか？ でも、ギゼルさんも子供達と戯れるのを楽しんでいるようだから、相手してもらってもいいのかな？

「ギゼルさん、無理な時は無理だと、きっぱり断ってくださいよ」

「大丈夫だ」

まあ、そもそも僕達が冒険者ギルドに来ること自体が少ないので、子供達を止めるよりはギゼルさんが都合の悪い時はちゃんと断ってもらったほうがいいだろう。

「それで、アレンとエレナは、やっぱりランクを上げたい？」

「あげたい！」

僕が改めてアレンとエレナにランクについて尋ねると、二人は迷いなく返答してくる。

まあ、アレンとエレナならそう言うよな。

「じゃあ……上げようか」

「やったー！」

僕が許可を出すと、子供達は全身で喜びを表現していた。

「子供達がCランクになれば、タクミくんのパーティはBランクになりますね！ そうなったらAランクの依頼も問題なく受けられるようになるんですよ！ 良いこと尽くしじゃないですか！」

アンディさんも大喜びしていた。

「アンディさん、そっちが本命ですか！ いや、ちよつと待ってください。子供達がCランクならパーティランクはまだBランクに届きませんよね！」

「いえ、実力は充分にありますので、そこはギルドマスターの権限でBランクにすることは可能ですね」

「だから！ ギルドマスターの権限を軽々しく使わないでください！」

アンディさんが熱心に子供達にランクアップを勧めていたのは、僕達のパーティランクを上げるためだったらしい。

「いいえ、人材の確保はもちろんのこと、能力の評価を正しく行うことはギルドマスターの責務です！ 軽々しく使っているのではありません」

僕はちらりとケイミーさんを窺い見たが、止めてくれる気はないようだった。

どうやら、僕達のランクアップは、ケイミーさんも賛成のようだ。

「ちよつと待ってください！ さっきから思っていたんだが……その子達がDランクで、Cランクになれるって本当なのか？」